

懐疑論からの脱出

——ヒュームの経験論をめぐる——

村野宣男

ヒューム (David Hume 1711—76) は、近世における徹底的な懐疑論者として知られている。ヒュームによってあらゆる経験的判断の信憑性が疑われ、外的実在、精神の実体、自我の存在、及び、客観的に存在するものとしての因果関係が否定された。この懐疑論によれば、あらゆる経験的判断の停止が要求され、日常的に想定される外的存在は、同一性をもたず無規定な区別のつかないものとなり、時間的経過において同一であるとされる自我が否定されることにより、判断の基盤が覆されることになる。又、客観的に、すなわち *a priori* に存在するとされる因果関係の否定は、科学発世界観の崩壊を意味する。すなわち、ヒュームの懐疑論は、世界に何等の支点も与えることなく、日常的世界の徹底的な破壊を意味するのである。しかし、懐疑論を提示するヒュームの意図は、日常的世界の破壊ではない。ヒュームは、懐疑論の立場を示し、それを批判することによって、日常的判断を基礎づける視点を求めようとしたのである。本論では、最初にヒュームの懐疑論の構造を明らかにし、彼が懐疑論から脱出する過程をみたい。それによって、ヒュームが、人間性 (human nature) に即した哲学を構成しようとする道を跡付けてみたい。

1

ヒュームは『人間悟性論』で、人間の理性の対象を、観念間の関係 (Relations of Ideas) と事実 (Matters of Fact) の二種に分類する。前者は数学的關係であり、“直角三角形の斜辺の二乗は、他の二辺の二乗の和である”とか“ 3×5 は30の半分である”という例が挙げられている。“この種の命題は、宇宙に存在している何ものにも依存することなしに単なる思考の働きによって見出される。自然の中にたとえ円や三角形が存在しなくとも、ユークリッドによって証明された真理は、永久に確実性と明証性を保つのである。”¹⁾として、数学的推論が経験界から超越していることが示される。一方、理性の他の対象である事実に関しては、確実な判断がなされることなく、“太陽が明日昇らないであろう”というこ

とは、“昇るであろう”という判断と同等の権利を持つとされる。ヒュームにとって、事実とは経験される事実である。経験は、感官 (sensation) と、感官により生じた感覚の刺激によって活動する内官たる反省 (reflexion) の二つの働きによって成立する。これら感官、反省によって生じた経験的事実は知覚 (perception) とされる。²⁾ ヒュームは、経験的事実に対して従来なされてきた判断には又、形而上学的なものが含まれていると批判し、懐疑的態度を示す。ここで、因果関係、外的実在、精神の実体、自我等が批判の対象となる。

ヒュームは、懐疑論の構造を次のように分析する。われわれの能力の不確実性の故に、経験に対する判断は他の判断によって証正される可能性をもつ。しかし、この他の判断も又、経験的判断である故に更に別の判断によって証正される。このような過程が無限に進行する結果、確実性はますます減少することになる。“有限な対象はどのようなものでも、無限に繰り返えられる減少の下に耐えることはできないであろう。人間の想像力の中に入るいかに巨大なものといえどもこの方法においては無に帰せられるに違いない。”³⁾ とされる。懐疑ということは、疑う対象が確実であってはじめてその力をもつ。疑う対象そのものが不確実であれば、懐疑の力そのものが衰えてしまう。しかし、懐疑は疑う対象の力を減少させることを意味する故に、疑う方も疑われる方も共にその力を減少しついに無に帰するのである。このような懐疑論をヒュームは、全体的懐疑論 (total scepticism)⁴⁾ と呼ぶ。疑うことによってより正しい判断が得られるということは、何かの基準があってはじめて可能である。後に述べるようにヒュームはこの基準を信念 (belief) におくのであるが、何等の基準なしに、ただわれわれの能力の不完全性を前提にして懐疑論を展開すれば、論理的には全体的懐疑論へと導かれるはずである。

以下、因果関係、外的実在、精神の実体、自我等の存在に関するヒュームの批判をみたい。ヒュームは、これらの存在に対して懐疑の見解を示すというよりは、これらの形而上学的性格を明らかにすることにより、存在そ

のものを否定する。厳密に言えば、この批判は懷疑論によってなされているのではないが、懷疑論も、これらの存在の否定も共に常識的世界の否定に赴く故に、ヒュームは包括的に懷疑論の下に扱ったと思われる。まず因果関係の批判をみたい。ヒュームによれば、対象の知覚の中には、原因や結果の知覚を見出すことはできないとされる。AとBという二つの対象が因果関係で結ばれているといわれる場合、AとBという外象を如何に調べたところで、原因と結果の観念を見出すことはできない。したがって、対象それ自身の実事関係の中には、因果関係は存在しないとするのである。“それならば、われわれが原因と結果と呼ぶところの二つの対象に注目して、このような因果関係という驚くべき結果をもたらす印象を見出すために、この対象をあらゆる面から調べてみよ。すぐに私は、対象のそれぞれの性質にその印象を求めてはならないことを知るのである。何故ならば、その性質のどれを選んで、対象は因果関係をもたないことを見出すからである。それにも拘らず、その対象は原因と結果という名の下にある。”⁵⁾ “われわれが、原因から結果へと推論する関係は、単に個別的对象を観察することから引出されるのではなく、又、一つの対象が他に依存していることが見出されるように、対象間の本質が互いに侵透することより生ずるものでもない。われわれが、諸対象をそれ自身において考えるとき、他の対象を包摂するような対象は全く存在しないのである。……”⁶⁾ とヒュームは述べる。諸対象間における事実関係としての因果関係は、疑われているのではなく、積極的に否定されているのである。

次にヒュームの外的実在に関する批判をみる。ヒュームは外的実在に関する常識的見解と哲学的見解の両者を示し、それぞれを批判する。常識に従えば、われわれが知覚する通りのものが外在すると考えられる。しかし、例えば、われわれの知覚する身体にしても、厳密に言えば印象に過ぎないのであって、知覚から独立したものである。音・味・臭に関して考えても、それらが外的延長をもつとは考えられない。又、外在を認めるわれわれの視覚といえども、何等かの経験と推論なしには、対象が外にあることを知ることができないことがある。⁷⁾ このように常識的見解は否定されるが、ロックのような哲学者が呈示する見解も妥当とはされない。哲学者は、形、容量、運動、固体性等を、色や味とは異なるものとして、外在するというが、ヒュームは、全ては知覚に存するとして両者を区別しない。“われわれの哲学的意見がどのようなものであろうと次のことは明らかである。

すなわち、色、音、熱、冷たさは、感官に現われる限りにおいて、運動と固体性と同じ仕方では存在しているものであり、両者の間に設ける区別は、単なる知覚からは生じないのである。”⁸⁾ 又、常識的見解では、時間的経過の上に、同一の対象が外在しているとするが、時間上の各点の知覚を厳密に見る時、決して同一ではない。⁹⁾ そこで哲学者は、これらの知覚の背後にあり、これらの知覚を統一しているところの実体たる真なる存在 (a real existence) を考える。¹⁰⁾ しかし、この実体は、知覚とは区別されたものであり、経験的事実ではない。一般的にこの批判を定式化すると、“われわれの感官が、印象から区別され、独立で、外的な何ものかに関する印象を提供しないことは明白である。何故ならば、印象は、われわれに単に知覚のみしか伝えないのであって、知覚を超えた何ものかに関しては、いかなる類似物たりとも伝えないのである。一つの知覚は二重存在〔知覚と外的実在〕の概念を決って作り出すことはない。……”¹¹⁾ とされる。

精神的実体の概念も上と同様の論理でもって否定される。“全ての観念は、先行する印象に由来する故に、心の実体に関する何等かの観念をわれわれが持つとするならば、われわれはその観念の印象も又持たねばならない。しかし、このことは不可能でないにしても非常に困難なことであろう。何となれば、印象は、実体に類似するという方法以外に、いかに実体を表象することであろうか。いかにして、印象は、実体に類似することができるであろうか。何故なら、実体を主張する哲学に従えば、印象とは実体ではなく、実体の持ついかなる特質も性格も持っていないからである。”¹²⁾ として、経験的事実からは精神的実体は知られないことが明らかにされる。知覚の根拠としての実体を考えなくとも、知覚はそれ自身独立したものとして十分考えることができるとして次のように述べられる。“われわれは、知覚以外のものについて完全なる観念をもたない。実体は知覚とは全く異なるものである。したがってわれわれは実体に関してのいかなる観念をもたない。何ものかに内在するということが、われわれの知覚の存在を支えるために必要であるとされている。しかし、知覚の存在を支えるために、何ものも必要であるとは思われない。”¹³⁾ 続いてヒュームは、自我(Self)の観念の批判に赴く。自我の存在を主張する哲学者は、自我を同一で単純なものと考えている。しかしわれわれが考える自我はよく観察すれば、常に内容を異にしており、決して同一なものではない。“自我あるいは人格は、ただ一つの印象ではなく、諸々の印

象がそれに関連しているものである。’14) 現実的知覚は、決して同一ではない。ここに同一性としてたてられる自我の形而上学的性格が示されるのである。

以上のように、因果関係、外的実在、精神の実体、自我の観念が、経験的事実としては認められないことが証明されている。この証明の根拠は、直接経験される知覚に忠実であり、知覚を想像力でもって超えて行かないところにある。因果関係等の否定は、経験論的方法の必然的結果であるといえる。知覚が事実的世界を構成しているならば、因果関係等は事実的なものとしては認められない。ヒュームは、これら因果関係等の意味を認めて行こうとする時、事実ではなく、想像力(magination)の世界に入って行かねばならなかった。

2

日常生活においてわれわれは、経験界に対して一定の判断を行い、生活上の事柄を処理して行かねばならない。しかし、懐疑論は、常に判断停止を要求する故に、経験界の実践的処理を不可能にする。又、経験界を因果関係において判断することは、最も重要な実践的行為である。ヒュームは、実践的判断の必要性より、全体的懐疑論から脱出する道を考え、先に否定された因果関係等の観念を取り戻して行く方向を探し求めるのである。

a priori な基準が存在しない限りにおいて、一つの判断が正しいか否かを決定する手段はない。判断が客観的な基準で正しいと判断され得ないならば、われわれは主観的基準を求めるより外ないであろう。ヒュームは、諸々の判断が想像力に与える影響あるいは活力は、同一ではなく異るとして次のように述べる。“心が、円滑に滞ることなく(with easiness and facility)対象に到らない場合は、判断は、観念を自然に握把した場合と同じ効果をもたない。又、この場合、想像力は、常識的な判断と意見から生ずるものと一致した感覚をもたないのである。この場合、注意は緊張の中にあり、心の態度には阻げがある(uneasy)。そして、自然な過程から逸れた精神は、その運動において、尋常な経路を通して流れている場合と同じ法則によって、少くとも同じ程度には支配されていないのである。’15) このようにヒュームは、判断の妥当性を判断における心の円滑性、滞りのない流れの感覚という主観的心理的場面に求めて行こうとする。このような感覚をヒュームは、自然な(natural)感覚としており、この感覚に支えられているのが信念であるという。“生き生きとした概念である信念は、それが何か自然で円滑なものに基づいていない場合は完全ではない。’16) 懐

疑論からの破壊的力から逃れる道は、信念という主観性に依るより外はない。“それ故に、自然が、全ての懐疑論の力を手遅れにならないうちに破壊して、悟性の上にゆゆしい影響を与えることを阻げたことは幸いである。懐疑論が全ての確信を覆元して、人間の理性を全く破壊してしまふまで、われわれが懐疑論に全く依っていたならばどうなることであろうか。もっともこのようなことは、絶対に起らないのであるが。’17) とヒュームは述べる。“自然が心にあらかじめ植えつけておいた能力’18) によって、人間は懐疑論から逃れることができるのである。

因果関係の概念もやはり信念によって取戻される。経験的事実を見る限りにおいて、われわれは、対象間における因果関係を知ることはできない。しかし、現実には、われわれは対象間に因果関係を定めており、又、この関係によって経験界を処理している。経験的事実の中に因果関係が存在しないならば、別の観点によって設定されたものでなければならぬ。ヒュームは、この新たな観点を想像力とする。われわれが、AとBの二つの対象に関して、Aが原因でありBが結果であると判断するのは、AがBに時間的に先行する形で継起的に生起するのを何度も経験する間に、Aが生ずればBが生ずるという関係を心の想像力が定めるからに外ならない。AとBという対象それ自体をいくつ観察しても、因果関係は見出せない。“これらの事実は、それ自体においては、お互いに全く異り関係がない。これらは、これらを観察し、これらの観念を集める心においてのみ結合する。したがって、両者の間の必然性は、この観察の結果であり、心の内的な印象以外の何ものでもない。’19) とされ、因果関係は、対象の中(in the object)ではなく、心の中(in the mind)に生ずるものであるとされる。’20) 想像力により、二つの対象がこのように結合されるときこれらの対象は何度も継起的に生じている故、心の習慣(custom)による結合ともいわれている。習慣による結合がなされる時、心は信念の状態にある。因果関係は、最終的には信念によって判断される。“信念という感情は、想像の単なる虚構に伴っているものよりは、より強く安定した概念である。そしてこの種の概念は、対象が記憶あるいは感覚に現存しているものと習慣的に結合することよ生りずるものである。’21) と述べられており、対象間が因果関係で結ばれているか否かは、信念が存するか否かに依る。

ヒュームの経験論に従えば、知覚を超えた外的実在を想定し得ないことは先に述べた。知覚と対象は本来同一であり、対象を知覚と切りはなして独立に存在すると考

えることはできない。外的対象の観念は知覚からは引きだし得ない。従って、「〔外的対象〕の感情 (sentiment) は、全く非合理的である故に、悟性とは異った能力から由来しているに違いない。……〔外的対象が存在するという〕意見は、全く想像力によらねばならないのである。……」²²⁾といわれる。「又、われわれの類似した知覚に同一性を与えようとする傾向性が持続する存在の虚構を作り出すのである。」²³⁾として、厳密にみればそれぞれ異なる知覚は、想像力によって同一と見做れるとする。哲学者が、実体的な外的存在を考える場合も信念を伴った想像力による。ばらばらに存在している印象は、その背後の統一的実体に支えられているとする考えは、力と活力をもつ。「信念の本質は、概念の力と活力に存しているのである。」²⁴⁾

ヒュームは、精神的実体の想定に関する議論を行っていないが、²⁵⁾ 自我に関して次のような考察をする。ある哲学者は、同一なる自我が存在すると考えているが、現実にもそのような自我を捉えようとしても、多様な知覚しかみることができない。ただ「互いにおどろくべき速さで継起し、常に運動している種々の知覚の束」²⁶⁾のみ存在するのである。したがって自我は、知覚の上に存在するものではなく、想像力が産みだすものである。すなわち、種々の知覚の継起をみるときに、これらの知覚は、それぞれ近い関係によって結合されている。これら近い関係にあるものを同一であると思ひ誤り、想像力が働くところに同一なる自我の概念が成立するのである。「同一性は、これら種々の知覚に真に属しているものではなく、又、これらの知覚を結合しているものではない。そうではなく、それらを反省する時に、想像力におけるそれらの観念の結合の故に、われわれがそれらの知覚に与える特質によるのである。」²⁷⁾ この議論における知覚の類似性は、自我としての類似性であり、それらが同一でないとする理由は、自我としての知覚がある時は苦、ある時は快であるということに存する。したがって類似であるという前提には、すでに同一なる自我が理解され想定されている。この意味で、ヒュームの自我の議論には問題がある。しかし、ヒュームの意図するところは、この同一なる自我は、知覚的事実から引きだされるものではなく、想像力によってもたらされているものとするところにある。

3

ヒュームの経験論では、経験における知覚のみが事実とされ、知覚に関する判断は、われわれの能力の不完全

性の故に常に懐疑された。又、因果関係、外的実在、精神的実体、自我等の概念は、知覚から導きだされることができない。ヒュームが、理性あるいは悟性との矛盾を犯してまで、信念によって判断停止から逃れ、想像力を通して、因果関係等のいわば形而上学的概念を取戻そうとしたのは、常識的世界に還ろうとしたからである。ヒュームは、思弁的な深遠なる哲学を否定し、常識的見解を重んじた。「哲学者であれ、しかし、汝の哲学を遂行する上において、尚、人間であれ。」²⁸⁾という言葉は、ヒュームの哲学の基本的姿勢を語るものといえよう。ヒュームは哲学的常識主義というべきものを志向したのであるが、この考え方が持つところの内的矛盾に葛藤もしている。この葛藤は、悟性の立場と常識の立場の間におこる。例えば、外的実在の問題で、悟性はそれぞれの知覚の異質性を主張する一方、想像力は同一性を主張する。ヒュームは、同一性を考えたいのではあるが、どうしても悟性の要求が気にかかるのである。「しかしながら、たとえわれわれがこのように想像力の自然的傾向性によって中絶的に生じてくる類似的対象あるいは知覚に持続的存在を帰属せしめるとしても、少しでも哲学的反省を行えば、この意見が誤りであることに気付くのである。」²⁹⁾ 懐疑論は、今まで扱って来た主題に関する深く、強い反省から生ずるのであるが、反省すればするほど、その反省が疑いに対立的なものであれ調和するものであれ、疑いそれ自体は強まるのである。不注意と無関心のみがわれわれに救済を与える。この理由で私は、この不注意と無関心に頼るのだ。……³⁰⁾とまでヒュームはいう。「このような不注意な方法で哲学を研究する人の行為は、そのような傾向をもちながら疑いに圧倒されてしまってその傾向を全く排斥してしまう者よりは、真に懐疑的である。真の懐疑論者は、自己の哲学的確信ばかりでなく、哲学的懐疑に関しても傲慢でない。そして、懐疑や確信に提供される単純な満足感を決して拒否しないのである。」³¹⁾とヒュームは述べているが、ここでは論理の次元を超えた一つの態度が問題となっているのである。

ヒュームは、悟性と想像力の間葛藤しながら、結局は、想像力を優先させるのである。しかし、ヒュームは単に恣意的な解決に赴いたのではない。想像力には次の二種の区別がたてられている。「私自身を正当化するために、私は想像力の中に次の二つの原理を区別する。一つは、原因から結果、結果から原因という習慣的変遷のように恒常的で必然的で、普遍的な原理である。他は、変化し易く、弱く、不規則な原理である。……前者は、われわれの思考と行為の基礎であり、それを取除くことに

よって人間性は、ただちに消滅し、破壊されてしまうものであり、後者は、人間にとって避けることができないようなものでも、必要なものでもなく、生活上においてそれほど有益なものではない。……”³²⁾ ヒュームは、想像力に関して、単なる空想的なものと、非空想的なものとを区別しているのであり、因果関係等に関する判断は、空想的想像力によってなされているのではない。この非空想的想像力は、心に妨げを感じない円滑性の下に成立している信念に伴われているものに外ならない。ヒュームは、外的実在に関しての悟性と想像力の葛藤の中で次のように述べている。“経験において、次のことほど明白なことはない。すなわち、情緒あるいは感情に関する抵抗は、感覚的妨げ(sensible uneasiness)をもたらすということである。その妨げは、外部から来ることもあれば、内部からくることもある。外的対象の対立あるいは内的原理の闘争からくることもある。それに反して、自然的傾向性を伴って生起するもの、すなわち、外的にはその傾向性を推進させ、内的にはその傾向性の運動と共に生ずるものは、たしかに感覚的快(a sensible pleasure)を与えるのである。”³³⁾ 感覚的快を伴う心の円滑性は、人間の傾向性に沿うものであり、又自然でもあり、ここには信念がある。非空想的想像力による主観的判断は、信念に基づく、悟性的判断であると考えられよう。

これまでの議論で、悟性(understanding)という言葉が、はっきりした概念規定なしに使われていたが、ここで理性、悟性、想像力の三つの概念について考察したい。ヒュームは、『人間悟性論』では、理性の対象を数学的对象と事実の二つに分けているが、『人性論』においては、推論行為は理性にかかわるものであり、事実に関する判断は悟性の役割とされている。因果関係の批判において、悟性の役割は、知覚的对象のもつ特質を識別することに限られている。外的実在と人格の同一性の批判で、悟性は、知覚対象間の区別をする能力とされている。すなわち、知覚対象のそれぞれを、それ自体として識別する悟性の能力が因果関係等の概念を否定する根拠となっている。悟性は、対象間のいかなる関係性の把握もなし得ない。因果関係が、想像力によって定められる前提となる継起的関係、外的実在および自我の同一性の前提となる類似性等は、悟性の概念に組み入れられていない。関係性は想像力によって立てられるのである。ヒュームは、類似、同一、時間における関係、量と数における割合、質における程度、対立、因果関係の七つを想像力の所産としている。³⁴⁾ 知覚に関する判断は、因果関係ばかりでなく、他の関係が想像力によってもたらさ

れるとするのである。このように悟性の能力には、知覚の内容が何であるか、例えば色とか形を確認する機能のみが与えられ、対象間のいかなる関係も認識し得ないことになる。しかし、ヒュームが、想像力と悟性に関して次のように述べていることに注目したい。“しかし、一方、想像力の空想が弊害をもたらす場合を考慮して、空想のもたらすあらゆる提案を拒否し、悟性、すなわち、想像力のもつ一般的にしてより確立した特質に執着するならばどうなるであろうか。この決断は、もし徹底に遂行されるなら、危険であり、最も致命的な結果を招くのである。”³⁵⁾ ここで悟性は、“想像力のもつ一般的にしてより確立した特質(the general and more established properties of the imagination)”とされている。又、蓋然性に関して述べているところで、判断が、一か他に決定し得なく判断停止の状況にあるとき、“想像力、あるいは悟性は一どちらのいい方をしても構わないのであるが、一対立する見解の間を動揺する”³⁶⁾とされる。又、“動機と行為の間の結合が、自然界の運動におけると同様に、恒常性をもつとき、その恒常性の悟性に対する影響は、一つの存在を他から推論するとを決定することに関してやはり自然界と同様である。”³⁷⁾として、悟性が因果関係を定めるかの如くいわれる。“更には、悟性は、二つの異った仕方において働く。すなわち、悟性の判断は、論証によるか蓋然性によるかであるが、それは悟性が、観念間の抽象的關係か、経験のみがわれわれに与える関係のどちらかに注目するからである。”³⁸⁾といわれるところには、悟性は理性の意味まで含んでいる。このように、悟性と想像力の概念は、重複するところがあり、悟性の概念は、一義的には規定され得ない。

想像力は、先にも見たように、単に空想的なものもある。想像力の妥当性は、信念によって保証される。信念は、想像力が人間の傾向性と本性に沿ったものであるとき、はじめて生ずる。信念は、想像力に属するものではなく、想像力とは異った心の働きによる。ヒュームは、知覚を経験的事実と見ているが、人間の傾向性と本性をa prioriなものと考えている。したがって、人間の本性に従う判断は、たとえ事実的判断でなくとも、恒常性をもつ。すなわち、人間の心は本性に従う限り一定の判断をせざるを得ないようにできている。³⁹⁾人間の心は、この判断において円滑性を感じ、信念をもつように形成されている。ヒュームは、想像力と信念にかかわる心の働きを総合したものとして悟性という概念を考えていたのではないか。因果関係等の批判において、悟性が想像力に反するよういわれているのは、因果関係等が、知覚

的事実の中に存しないことを強調する為であると思われる。厳密に言えば、知覚的事実は、悟性ではなく、感性と内的反省にかかわるものである。これが、悟性にかかわるとされることは、知覚的事実は、すでに判断されたものであることを意味する。知覚的事実たりとも、人間の本性に沿った想像力のかかわりの上にあり、信念ということが問題にならないほど確実なものであると考えることができる。したがって、悟性が“想像力のもつ一般的にしてより確立した特質”といわれるのである。このように悟性を理解してはじめて、因果関係等の議論に終始している『人性論』の第一部が、「悟性に関して」と題されていることが理解されるのである。人間の本性への直観を伴った想像力としての悟性こそが懐疑論からヒュームを脱出させたのである。

註

- 1) David Hume, *Enquiries Concerning the Human Understanding and Concerning the Principles of Morals*, ed. L. A. Selby-Bigge (Clarendon Press, Oxford, Second edition-1902), p.25.
- 2) David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. L. A. Selby-Bigge (Clarendon Press, Oxford 1965), Book I, Part I, Sect. I, II, Book III, Part I, Sect. I. 尚、感官と反省の知覚は、印象と観念に分類され、観念 (idea) は、印象 (impression) の力の弱った形態であるとある。
- 3) *Ibid.*, p. 182.
- 4) *Ibid.*, p. 183.
- 5) *Ibid.*, p. 75.
- 6) *Ibid.*, p. 86.

- 7) *Ibid.*, p. 191.
- 8) *Ibid.*, p. 192.
- 9) *Ibid.*, p. 199.
- 10) *Ibid.*, p. 199.
- 11) *Ibid.*, p. 189.
- 12) *Ibid.*, p. 233.
- 13) *Ibid.*, p. 234.
- 14) *Ibid.*, p. 251.
- 15) *Ibid.*, p. 185.
- 16) *Ibid.*, p. 186.
- 17) *Ibid.*, p. 187.
- 18) *Ibid.*, p. 183.
- 19) *Ibid.*, p. 165.
- 20) *Ibid.*, p. 165.
- 21) *Enquiries*, p. 50.
- 22) *Treatise*, p. 193.
- 23) *Ibid.*, p. 209.
- 24) *Ibid.*, p. 199.
- 25) しかしヒュームは諸々の能力を具えた精神を想定していることは明からである。ヒュームの立場は、二元論と二元論否定の間において定まらないままにある。
- 26) *Treatise*, p. 252.
- 27) *Ibid.*, p. 260.
- 28) *Enquiries*, p. 9.
- 29) *Treatise*, p. 210.
- 30) *Ibid.*, p. 218.
- 31) *Ibid.*, p. 273.
- 32) *Ibid.*, p. 225.
- 33) *Ibid.*, pp. 205—206.
- 34) *Ibid.*, Book I, Part I, Sect V, Part III, Sect I.
- 35) *Ibid.*, p. 267.
- 36) *Ibid.*, p. 440.
- 37) *Ibid.*, p. 404.
- 38) *Ibid.*, p. 413.
- 39) *Enquiries*, pp. 46—47.